浄土宗西山禅林寺派

潮音寺だより

第347号
平成24年9月

電話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
choonji@aichi.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/　ナモの寺 検索
〒456-0034　名古屋市熱田区伝馬一丁 10-11

【語意】到彼岸
生死に迷う此岸から、彼岸である涅槃（悟り）に到ること。また、そのための菩薩の修行。

撮影：超空正道

利根川（とねがわ）の支流に
渡良瀬川（わたらせがわ）という
皇海山（すかいさん）に源を発し
足尾山塊（あしおさんかい）の水を
集め流れる川がある

古く
日光を開山した上人に
由来するものとぞ

上人
川を渡るに
ほど良き浅瀬を見つけ
その地を
渡良瀬と
名づけたという

そして今
西に沈む夕日美しい
渡良瀬橋が架かる

どう渡るかは
あなた次第

到彼岸（とうひがん）

私の母の郷里は、岡崎の岩津という所です。小学生の頃まで、夏休みになるとは、よく泊まりに連れて行ってもらいました。今でこそすっかり開けていますが、当時は、自然いっぱいの所でした。田畑が多くあり、近くには小動物がいる清流の小川があり、少し行くと、大川（矢作川）があって、可愛がってくれた亡き祖母の姿とともに、もう半世紀以上経ちますが、それらの風景が懐かしく思い出されます。

ただ、何才の頃だったかは覚えていませんが、水遊びしていて、その大川で流されたことがあります。幸い、大人が下流で受け止めてくれたので助かりましたが、そんなこともあって、私は、泳ぎが全くといっていいほどできません。

川というものは、大小によりその相違はありましょうが流れがあり、川底は平坦ではなく、思わぬ深みがあったりして、向こう岸へ渡るという行為は、よほど泳ぎに慣れたものであっても、なかなかできるものではありません。まして、私のように、泳ぎに自信のないものは、いくら、彼の岸には、すばらしい何かがあると分かっていたとしても、激流に飛び込む勇気は出ないものです。そこのところを人生に譬えて、釈尊は、

数多き人々のうち
彼岸に達するは
まこと　かず少なし
余の人はただ
この岸の上に
右に左に
彷徨うなり

（『法句経』85番）

とおっしゃっています。

仏教におきまして、「**到彼岸**」、つまり此岸から彼岸に渡るという行為を、迷いの世界から悟りの世界に到達するという意味に用います。『**般若心経**』正しくは『**摩訶般若波羅蜜多心経**』という経典をご存じと思います。「**波羅蜜多**」がサンスクリット語「**パーラミター**」を音写した語で、漢訳されたものが、この「**到彼岸**」という語であります。

なお、「**パーラミター**」は、言語学的には、「**完成**」「**熟達**」と解する方が正しいともいわれますが、要するに、「**般若**」が「**智慧**」という意味で、仏の智慧を完成させることが、悟りの世界に入るということになり、どちらに解釈したとしても、大きな相違があるわけではありません。

ちなみに、米国に「パラマウント」という映画会社がありますが、英語の「Paramount（最高権威者、卓

越した）」の語源は、サンスクリット語「パーラミター」と同じだと聞いたことがあります。確かに、一脈通ずるものがあります。

さて、仏教の目的は「**悟り**」であるといわれます。しかし、われわれ衆生は凡夫なるが故に、こちらの岸で、うろうろ彷徨っている外はないのでしょうか。その前に、「**悟り**」とは一体何なんでしょう。それが分からなければ、求めようにも、求めようがないといわれるかもしれません。

釈尊は、三五才で成道された、つまり、悟られたといわれます。では、それ以降、釈尊は悩んだり、苦しんだりすることはなかったのでしょうか。いや、釈尊とて、悩み苦しまれたことが、仏典の中にしばしば出てまいります。たとえば、釈迦族の祖国は、コーサラ国によって滅ぼされています。釈尊は、本来釈迦族の王となるべき人であったわけですから、その心中は察するに余りあるといわねばなりません。事実、コーサラ国が進軍の折、釈尊は、街道の一本の枯れ木の下で端座し、三度まで阻止をされ、四度目には受け入れられたと仏典にあります。

また、釈尊は、八十才で入滅されていますが、その死因は、食あたりだといわれています。チュンダという信者から供養を受けた、豚肉ともキノコともいわれますが、おそらく、大変な腹痛と下痢とで苦しまれたに違いありません。そして、自責の念で号泣するチュンダに対して、「おまえの供養は、私を悟りに導いてくれたスジャータの乳粥の供養に等しく尊い」とおっしゃったといわれます。

生身の人間が生きていく上で、病気や災難は、避けて通ることができません。痛いときは痛いし、苦しいときは苦しいのです。『**阿弥陀経**』に、極楽の蓮池には、「**青蓮華は青く、黄蓮華は黄色く、赤蓮華は赤く、白蓮華は白く輝いて微妙な香が漂っている**」とあります。

何気なく読めば、何でもない記述ですが、**青いのに赤くなりたい**といって苦しんでいるのが、われわれ凡夫であります。**青が青く輝く**、これが「**法**」であり、そう領解することを「**悟り**」だというのです。

そして、最期には、阿弥陀仏が用意して下さっている彼岸への橋を渡らせていただければよいと領解すること、これを「**安心**」といいます。

もうすぐお彼岸であります。自分色の蓮華を咲かせることができるよう、先ず種を蒔きましょうか。

◎**微妙**（びみょう）

「微妙な関係」「微妙なニュアンス」「微妙な答え」「微妙な響き」……。

この「**微妙**」（仏教ではみみょう）という語の真意はなかなかつかみとりにくい。「細かいところになんともいえない、表現しにくいものが含まれている」というのが字引の説明だが、受け取り方によっては、あいまいさがこめられているとも考えられる。

しかし、この語の本来の意味はあくまでプラスのニュアンスをもっている。たとえば、釈迦の教えは微妙である、という用い方をする。この場合は、どちらにも受けとめられるということばではなく、釈迦のことばには、細かい部分にとてつもなく深い意味がこめられているという表現なのだ。だから、真剣に聞かなければならない、という教えになる。

つまりは、ディテールに味がある、とでも解釈したらいいのだろうか。

しかし現在の総理大臣をはじめとする重要人物の微妙な発言は、真剣に聞けば聞くほど、細かいニュアンスがわからなくなってしまう。これでは、微妙ではなく、奇妙とでも表現したほうが正確かもしれない。あいまいと微妙とでは、天と地ほどの大きな違いがあるのだから。

（『仏教のことば』ひろさちや監修）

今月の一言

長所も、鼻にかければ短所
短所も、自覚すれば長所

雑記

▼秋彼岸施餓鬼会

先般もご案内させていただきましたが、秋の彼岸施餓鬼会を、今回に限りお中日ではなく、例年どおりの日時で勤修いたします。お間違いなきよう、ご参詣いただきますよう、ご案内申し上げます。皆さまお誘い合わせの上、ご来山下さいませ。

・日時　9月23日（日）
午後1時30分～2時45分

▼イモ

小指ほどもない、台所から出た、切れ端の里芋（サトイモ）と薩摩芋（サツマイモ）を土に埋めてやりましたら、ぐんぐん大きく伸びてきて、その計り知れない生命力に感動しております。

また、雨上がり、里芋の葉っぱに残っている水玉は、真珠よりも美しく、しばし見とれるほどです。薩摩芋の葉っぱには、テントウムシがやってきて、遠慮がちにかじっていき、それも結構可愛いものです。

◆芋の葉に不思議凝らして水の珠　沐魚